

「こんにちは」から始まる国際交流

かにえ国際交流友の会

K I F A 会 報

No. 3 April 1996



国際交流友の会に期待する

蟹江町長 佐藤 篤松

かにえ国際交流友の会におかれましては、各種の国際交流事業の推進、「日本語しゃべろう会」(外国人向け日本語教室)での活動をはじめ、ボランティア活動事業におけるご活躍は素晴らしいものがあり、敬意と感謝を表します。

今日、地域における国際化はイベント形式を重視のものから、個人、団体がボランティアとして、何が出来るか考える時代にきていると言われていいます。

こうした時代に、かにえ国際交流友の会の活動も、更に幅が広がり、会員の皆様方がそれぞれの行事に合わせたボランティア活動をしていただいていることを感謝いたします。又、昨年より設けられました「語学ボランティア登録制度」(町公共機関、医療機関等で、日本語を話せない外国人の方に、通訳として活動していただける方々の登録制度)は大変好評で、今後も活躍していただきたい事業のひとつでもあります。

最後になりましたが、かにえ国際交流友の会の益々のご発展と、会員の皆様のご健勝とご多幸を心からお祈り申し上げ、ご挨拶といたします。

1995年度の活動雑感

会長 棚橋 美知子

今年日本語しゃべろう会と、語学ボランティアのふたつの新しい活動がスタートしました。参加者の方々には、外国人としっかり向き合える交流活動に、一層やりがいを感じていただいているようです。日本人だけの社会では気が付かない失敗や戸惑いはありますが、人種や文化、風土の違いを実感する時でもあり、自分を省みる時でもあるのです。

外国人は自国の国旗に誇りを持ち、非常に大切にするといいます。当会主催のイベントには外国人参加者や講演者の国旗と日本の国旗を可能な限り飾っています。幸い、国際センターで無料で貸出していただけなので助かります。本年度は特に Bangladesh の料理や工芸品を紹介し、好評をいただきました。また、Bangladesh の国旗は鮮烈な印象を残しました。Bangladesh の国旗が日本の国旗と地色が緑と白の違いはあるものの、中心が赤丸でまったく同じだということを私はそのときはじめて知ったのです。日本の赤丸は太陽を表わしますが、Bangladesh では、緑色が農業とイスラムを、赤丸は独立のために流された血を表わしているそうです。思いがけなく自分の国の旗を蟹江で見つけた時の Bangladesh の人たちの感激ぶりには、こちらが戸惑う程でした。後に、国旗の図柄の意味を知り、彼らの国旗に寄せる熱い想いをようやく理解できたのです。

人種、文化、風土の違いに戸惑いつつも、互いの偏見や思い違いを克服して、ゆるやかにしっかりと築いていく友情こそ、当会の財産だと思うのです。今年もどんな外国人が蟹江を訪れるのか楽しみです。ひとつひとつの出会いと交流を大切にしながら、会員の皆様と共にこの財産をふやしてまいりたいと思います。一年間のご協力・ご支援に対し、厚くお礼申し上げます。



日本語しゃべろう会

KIFAの日本語教室、“日本語しゃべろう会”は地域にいらっしゃる外国人の方々と、日本語を通じて共に楽しむ会です。

あなたも私達と一緒に参加しませんか。また、あなたの周辺に外国人の方がいればこの教室のことをぜひ教えてあげてください。今後も楽しい企画を計画中です。

今回、参加されている外国人の内の3人の方に感想を書いていただきましたので紹介いたします。

クラリッセ・ジレウ・テラハタ (ブラジル)



日本には4年間いますが、最初の2年間は仕事が無かった事や、病気の時、

それに言葉が分からなかった事などでとても苦労しました。何もかもあきらめようとも思いました。でも辛抱することができ、目標に向かって進むことができました。

この2年間同じ会社で仕事をしています。いろいろ手助けをしてくれた日本人の友達が好きです。日が経つにつれて日本が前より好きになってきました。

現在、KIFAで日本語の勉強をしています。この勉強会は無料で、ボランティア精神でいっぱいの人達により運営されています。日本語を習得することでこの国での生活はもっと容易になり、機会があればこちらの習慣も習えることを夢見ています。

アリモト トシコ (ブラジル)



日本にきて四年間と五ヶ月になります。

日本に来る事を決めた時は、ぜんぜん日本語が分かりませんでした。ただ、勇気と、自由だという事だけが自分を日本に来させたのだと思います。

日本には心強い親類はいませんでした。たくさん友達ができました。

私の最初の職場は学校のように規則や禁止などがあり、とてもきびしいところでした。寮でも同じでしたが、日に日にそれも覚えていきました。

言葉の問題で歯科や眼科などでとてもこまりました。

やっと日曜日に日本語の教室に通えることができましたが、まだ文章がうまくできず、会話はとてもむりです。

どの授業でもがんばりますので、皆様のご協力をおねがいします。

Obrigado
Domo arigato gozaimasu

ヤマサキ ヤスト (ブラジル)



私は日系ブラジル人です。日本には五年近く居ます。

まさか私が祖父の故郷へ来るとは思ってもいませんでした。

日本語は多少知っていましたが、日本にきて発音も何もかもブラジルと違っていたので最初はとまどいました。でも、東京から九州まで、色々な人と知り合いました。

現在、会話はわりとよくなりましたが、読み書きはまだできません。

近くの役場で日曜日に日本語を教えているので、私の休日の日には通っています。

目的はまだ達成していませんが、皆が知りたがる先進国で活動的な日本に自分は来れてとても幸せです。



日本語教室風景

今後の予定

4月14日(日)……スペシャルデイ(ピクニック)、

4月28日(日)、5月12日(日)、5月26日(日)、6月9日(日)、6月23日(日)

いずれも場所は蟹江中央公民館で、時間は10:00~11:30です。



日本の思いで

イブラヒム・カーン(ラジュ) (バングラデシュ)

初めて日本に来たときは、毎日が驚きと興奮の連続でした。それというのも言葉、習慣、食べ物などがバングラデシュのものとは、全然違っていたからです。ある会社に面接に行ったとき自分の思っていることをうまく伝えられず、これから日本で仕事をして、そして生活を楽しむためには日本語を勉強しようと思いました。時間が経つにつれ日本人の仕事に対する熱心さや、考え方がわかってきた時は、日本語を勉強してきて良かったと思いました。又、幸運なことにその時K I F Aの皆様のおかげで暖かいもてなしを受けたことがこの素晴らしい国のことをもっと知り、長く住みたいと思うきっかけになりました。

K I F Aのイベントでは日本の国に関すること、言葉、習慣、生活様式とかを知る良い機会になり、友情は国籍に関係なく築けることも知りました。

最後に日本にいたときに親切にいただいた方々と、K I F Aの皆様にとっても感謝しています。ありがとうございました。(1996年1月帰国されました)



蟹江の思い出

揚 汝 義 (中国)

蟹江町で2年間の研修期間にK I F Aの皆様と出会って、とてもいい事だったと思っています。この間に、棚橋さんにいろいろお世話になりました。ありがとうございました。蟹江町は交通がとても便利で、環境が美しいところです。人々はやさしくて、親切だったと思っています。中国に帰っても忘れていません。いい印象を残していますから。

とくに、K I F Aに参加していた間に、いろいろな活動をしました。内容は豊富でした。外国人たちは、日本人と一緒に本格的な日本の民族の生活や文化とかを体験しました。私に印象を深く残しています。帰ってから、私の家族に詳しく紹介しました。家族の皆も、日本についてだんだんわかってきました。

2年間は、人の一生としてとても短いですが、私にとって重要だと思っています。K I F Aのおかげで、いい勉強になりました。私はK I F Aがもっと大きくなるように祈っています。

私はいま日本語の勉強を続けています。機会があれば、また蟹江へ行きたいと思っています。(原文も日本語)
(1995年12月帰国されました)



みなさん、こんにちは

ルイス・アカサワ (ペルー)

私は、ペルーから日本にきて4年になります。こちらで、仕事にも恵まれ大変感謝しています。

日本に着いたばかりの頃は、電車に乗りまちがえて大変だったこと、スーパーで買物ができなくてラーメンばかり食べていたこと、日本語は「すみません」と「ありがとう」しか言えなかったことなどを思い出します。それも時と共に、乗り越えてきました。

日本の音楽では、演歌が好きです。ペルーではフォルクローレが好きで、ケーナ(縦笛)やサンボニャ(連管笛)を吹きます。

現在33歳、独身です。気持ちは今もこれからもずっと若いつもりです。

(注: フォルクローレは、南米アンデス地方のインディオたちの民族音楽。ケーナやチャランゴなどを用いた素朴な哀愁味に特徴がある。サイモンとガーファンクルの「コンドルは飛んでいく」でポピュラーになった。)



ウェールズとウェールズ語

藤田 美保

私は1979年と87年の2回、文部省在外研究員として錯体化学の研究のためカーディフ(ウェールズの“首都”)にあるウェールズ大学に滞在しました。この時見聞したことやその後の知見をもとに、門外漢ですが日本では以外と知られていないウェールズ(Wales)とその固有の言語であるウェールズ語(Welsh)について少し書いてみたいと思います。

ウェールズは大ブリテン島、すなわち英国本島の西端の部分を含め、日本ではイギリスの一つの“地方”と考えている人が多いと思います。しかし、ここはウェールズ語を公用語(英語と併用)とするウェールズ人にとっては一つの“国”なのです。^{注1)}例えばウェールズに来ればすぐ気づきますが、道路標識を含めてすべての公用文がイングリッシュ語(英語:English)とウェールズ語の二言語併記になっています。

このウェールズ語はスコットランド語(Scottish Gaelic)、アイルランド語(Irish Gaelic)と同じくケルト語に起源を持つもので英語(English)とは全く異なるものです。^{注2)}ですからウェールズ語を英語の一つの方言と考えるのは全くの間違いです。

普通にかかれる、“Wales”は英語表記であって、ウェールズ語では“Cymru”(クムリという発音に近い)です。この言葉はウェールズの地名、Caerdydd(英語でCardiff)、Casnewydd(同Newport)、Tywyn等でわかるように、英語の観点では“母音”が少なく、発音もそのアルファベット表記と違っていて奇妙に見えます。しかし、スコットランド語が話し言葉としてはほとんど聞かれないのに対して、ウェールズ語は現在も多数の人々によって日常的に使われる生きた言葉なのです。**ウェールズ**

南ウェールズ、特にカーディフではイングランドの出身者が多いためそれほど市中で耳にしません。北、あるいは西ウェールズでは地域により今なお70%以上(ウェールズ全体では約20%)の人々の日常語です。もちろんこの内のほとんどの人々は英語とはバイリンガルです。これを反映して[BBC Cymru]と[HTV Cymru]の2つのウェールズ語だけによるテレビ放送もあります。

ケルトは共通の伝統として“Son of”を意味するものを家族名(部族名)の接頭語として用いていました。これはスコットランドでは“Mac”あるいは“Mc”(例:MacDonald,McCartney等)であり、アイルランドでは“O”(例:O'Brien,O'Connor等)です。そして現在でもこのような姓を持つ人はたくさんいます。^{注3)}一方、ウェールズでもやはりこれと同様な意味を持つ、“Ap”(例:ApWilliams,ApDavies)がかってありました。しかしこの伝統は現在絶えてしまいました。

同じ起源であっても、独自の法律、制度等^{注4)}を

持っているスコットランドでNative Languageがそれほど話されないのに対してほとんど自治権を持たないウェールズでは反対に独自の言葉が生き続けているのは興味深いことです。これは“United Kingdom”の一方の構成員(統治者)として王様を出したスコットランドと、常に被征服者(被統治者)であったウェールズの立場を反映しているのでしょうか。

ウェールズでは1970年代に民族自決権獲得のナショナルリズムが盛り上がり、国民(住民)投票が行なわれましたが、スコットランドと同様過半数獲得に失敗しました。私が最初にウェールズにいた1979年頃ではその余波でしょうか、イングランド人の留守別荘が放火されるといった事件が起こっていました。公立学校などではウェールズ語教育も行なっているようですが、新しい世代ではそのアイデンティティの保持とは別に、言葉の上では“英国化”が進み、ウェールズ語を話す人の数は近年減少しているといわれています。

Cymru Am Bis! (“Wales forever!” in English)

注1) 例えば、5ヶ国対抗ラグビー大会(Five Nations' Rugby Football Match)は毎年開かれる伝統ある大会ですが、ここでの5ヶ国とはイングランド、ウェールズ、スコットランド、アイルランド、フランスなのです。

注2) 他にケルト語としてマン島のManx、コンウォール地方のCornishがあったがCornishは完全に死語となっています。

注3) 1979年に日本の太平洋首相が来英しました。この時、あるイギリスの新聞は彼の名を“O'Hira”と書いていたのを思い出します。

注4) 一例として、スコットランドは以下の三つの銀行から、独自の紙幣を発行している:Bank of Scotland, Royal Bank of Scotland Ltd.,Clydesdale Bank Ltd.

(追記) 1980年代末にボーイソプラノの逸材として話題となっていたアレッド ジョーンズ(Aled Jones)は北ウェールズの出身で何枚かのCDを出しています。その内のCD、“歌の翼に”では15曲中7曲をウェールズ語で歌っています(ついでながら、彼は一時“大同生命”のTVのCFに出ていた)。機会があればぜひ聞いてみてください。



ブエノスアイレスを訪ねて

黒川 邦子

日本からはちょうど地球の反対側にあたる国アルゼンチン、その国の首都であるブエノスアイレスに降り立ったのは8月の下旬、猛暑であった名古屋を抜け出して35時間余りたった時でした。街の名は『良い空気』を意味し、季節は日本とちょうど反対の冬でした。

街並は重厚な石の建物（300年くらい経っている）と近代的なホテルやアパートが同居し整然と区画されています。都心には数多くの公園があり、それぞれに工夫を凝らしたモニュメントや石像があるので目の保養になると共に心も和みます。

メインストリートは世界一を誇る18車線の広い通りなのですが、朝晩のラッシュ時には車がひしめき合い大変な混雑ぶりです。その原因の一つとしてタクシーの量の多いことが挙げられるかも知れません。「タクシー」と手を挙げるなら2～3台は一度に止まりそうなのですから。また、ビックリしたのは車のマナーの悪さです。2車線に3台の車が並ぶのは当たり前のように、車線変更のウィンカーの点滅も出しているほうが珍しいくらいなのです。

国民はその9割以上がスペイン、イタリアを主とするヨーロッパ移民で占められています。南米のわりに治安が良いことと、国民の生活に南欧の習慣が色濃く根付いていることはそのためでしょうか。公園を歩くと、お天気が良く暖かければ、春であっても水着で日光浴をしている人々を見かけます。

カフェテリアやレストランでは、室内よりもむしろ歩道に設置されているテーブルで太陽を背にコーヒーを飲むのを彼らは好みます（料金は外の方が少々高いようですが）。

ロビーなどの扉をレディーファーストと称して男性が開けにくるまで扉の前で待っている女性などもいます。このような、まるでヨーロッパかぶれと言ってしまうまでもありますが、なにはともあれそう呼ばれるのはこういった理由からなのでしょう。

物価に関しては全体的に高いといえるでしょう。ただし野菜、肉類は安く手に入ります。海に面した国にしては新鮮な魚介類が手に入らないのは残念なことです。電話代、人件費は特に高く、メイドを雇うにしても他の中南米諸国に比べると約4倍の賃金を支払わなければいけません。

私はわずか4ヶ月の滞在でしたので、言葉のネックのせいもあり、なかなかアルゼンチンの文化に触れるまではいきませんでした。日本人は日本人同士でかたまってしまいう傾向があり、この国の言葉であるスペイン語が話せなくても生活ができてしまうのです。何か、外国にいるのにもかかわらずもったいない過ごし方をしたような気がします。





海外プロジェクト物語

成田 富美雄

フランス語では、根無し草、放浪者のことを、「デラシネ」と呼んでいます。平成6年9月までの足掛け11年間の私は、まるで「デラシネ…海外流転者」のようなものでした。

1983年1月、念願のコンクリート工事のワークパーミット（労働許可証）がクエート政府より発行されました。なんと私は3ヵ月間それを待ったのです。

通常このような許可がないと、どの国でも技術者として働くことは出来ません。

その後1年間、中近東クエート国営精油所既存施設でシビルエンジニアとして働きました。その頃は半年業務すると1ヵ月間の有給休暇がありました。

クエートを手始めに、北アフリカのアルジェリアで家庭用冷蔵庫プラント建設管理、イギリスでの企業化調査、中国北京の世界貿易センター設計管理、アメリカミズリー州のバイオキョウワプラント改修工事、台湾親店ゴミ焼却場建設、台湾六福の世界六大陸遊楽園施設施工管理、台湾五股の新武貿易公司新築工事の海外プロジェクトを経験しました。

先日、学習中の中国語教室で大学4年生の女性クラスメートから「超水河期の日本では就職機会がない、台湾で日本語教師をしたいのでどこか適当なところを紹介してくれないか」と頼まれました。

その後、台北の知人に国際電話をかけ、国立T大学

付属語学研修所で日本語教員の空席がある、と聞いたので彼女にそのことを伝えました。

このことで痛感したのは、私が初めてクエートに向かって飛び立ったときのような悲壮感が、今の若い人たちにほとんどなく、日本でダメなら外国で仕事をすればいい、そんな割り切ったボーダーレス感覚を感じます。

海外プロジェクトでの契約上の使用言語は、それがどこの国であれアメリカ英語です。残念ながらイギリス英語は世界ではマイナーなのです。

ふつう英語＝会話のような図式で英語学習を考える傾向がありますが、実際の日常業務に於いては、質疑回答レターでの日本語→英語訳、ミーティングでの英語筆記などライティング力がかなり重視されます。

会話では、業務上不明点の質疑に対し説明し、説得することが要求され、スケジュール調整の進行役のような役目を担うことがあり、決して単純ではありません。

常に英語で指示し、決断することが求められます。それが海外エンジニアの資格なのです。



ボリビア便り

加藤 靖恵

仕事も1年たち、ポスターや紙芝居を作って、子供や保母さんたちに栄養、衛生の基礎の基礎を話しています。話すのも確かに大変ですが、これはボリビア人に助けられてまだ良いのですが、ポスター、紙芝居作りに毎日追われているようです（仕事をしているというより本当に追われている気分です）。でも子供達

の目が私の作った資料を見ているのを見ると、そして子供達が私の資料を見て質問してくれたりすると、「やっぱり見ることによって興味が出て、話を聞いてくれる」と思い、また次の資料づくりの励みになります。特に紙芝居はほとんどの子供が気に入ってくれました。

あと残り少ない10ヵ月間、1つでも多く子供や保母さんに分かってもらえたら良いなと思っています。（加藤さんの絵葉書より）

注）蟹江出身の加藤さんは1994年12月から海外青年協力隊の一員としてボリビアに滞在中です。

モンタナに帰って

リチャード・P・メレス (USA)

私が妻のバレリー、娘のズズと蟹江に住んでAETの仕事をしてきたのは、もう3年も前のことです。アメリカに帰ってからモンタナ州にあるモンタナ大学の大学院に入学し、そこでアジアの文化と日本語を勉強しています。私のふるさととはメイン州ですが、モンタナ大学の大学院が勉強するのに適していると思った（ほんとうは行ったことがないところへ行ってみたかった）からです。

モンタナ州はアメリカで4番目に大きい州ですが、人口はわずか79万9千人です。広さは380,848km²、日本が372,050km²ですからその広さが想像できるでしょう。モンタナ州のニックネームは『大きな空の国』です。モンタナ州の西部には高くそびえる山が連なり自然がいっぱいの州です。『リバー・ランズ・スルー・イット』はモンタナ州の美しい自然を知るのにとっても良い映画です。

大学で勉強しているときを除いて、私はトニー・ガルメとユカ・タチバナによって運営されているLINCという団体で働いています。LINCには二つの目的があって、その一つは日本人留学生のためのアメリカの大学への導入講座で、1ヵ月間大学での勉強の仕方、英語、アメリカの文化について勉強します。この講座を受けた後それぞれ思い思いの大学に入学します。



蟹江のみなさま、こんにちは

ドゥアン・ダオ (タイ)

私たちのことを思い出して下さい、ありがとうございます。私も家族に、かえり国際交流友の会(KIFA)のこと、そこでみなさまにいろいろお世話になったことを時々話しています。KIFAでは、どこの国でも差別しないおつきあいをさせていただき、とてもうれしく思いました。私は3ヵ月間の滞在中ホームシックにはなりません。逆に帰国前夜は日本を離れるのが淋しくて眠れず、夜遅くまで起きていました。次の朝起きて、窓の外の景色をしっかりと目に焼きつけておこうと思いました。KIFAは外国人にとり、安心して参加できる会であり、私にとっても大切な会でした。私たちは日本に来る前、日本のことをいろいろ聞かされてきます。たとえば、「日本人は冷たい」「日本はこわい所」など。でもこの会では前に聞いていたことは違ってました。日本人のみなさまは心温かくて人情があります。日本の文化や習慣を教えてくださいました。決して忘れません。特に私は日本語がすごく好きでした。着物もとても好きでした。着物を着るとみんなステキに見えます。タイでもタイ衣装は特別の時しか着ません。KIFAに心から感謝しています。次に、私の家族のことを話したいと思います。家族は10人で、大家族です。男5人、女5人で、私は8番目です。私以外はみんな結婚しています。経済的には中位です。私は両親が高齢で病弱のため、一生懸命仕事に励んでいます。タイは不景気で生活が苦しいので、仕事以外にアルバイトをしています。私の夢は美容師になって美容院を開くことです。その勉強もやっています。一生懸命やれば、いつか夢はかなうでしょう。その時には、KIFAのみなさまに1番にお知らせいたしますので、応援してください。

これから、KIFAがますます社会に役立ち、発展しますように祈っています。



もう一つは3週間の夏期短期講座です。これは日本の高校生を対象としたもので、アメリカ文化を知るための行事とか、歴史の舞台になった場所の見学などが組み込まれています。さらにアメリカの歴史、文化、生活様式、英会話等の勉強ができます。

私はLINCの一員としていろいろな授業をしたり、生徒たちとモンタナ州のあちこちに出かけたりしています。今年の夏は、仙台の尚絅女学院から来ている元気な女の子たちといっしょに山登り、ヘレナ(州都)への旅行、インディアンへの儀式に参加、ハックルベリー摘み等を楽しんだりしました。又グレイシャー国立公園を訪ねたり、ショッピングをしたりと、とてもすばらしい夏でした。

大学の授業の合間には、初級・中級の日本語を大学生に教えています。日本語クラスの生徒でもあり先生でもあるわけです。

蟹江に住んでいたことは、私を日本のことを学びたい気持ちにかきたてると共に、モンタナ州でいろいろなことにチャレンジするのに役立っています。今は蟹江での生活が懐かしく思い出され、蟹江に住めたことに感謝しています。



「かにえ国際交流」とボランティア精神

山田 典和

過日の阪神大震災の生んだ「ボランティア活動」と言う言葉を、何度となく聞くことができました。

また、色々な感動した場面も見せつけられました。ボランティアとは何・誰にどうせよと言われるのではなく、自分から進んで行動に移すをモットーに、することかと思えます。先日私共の息子等十数名、名古屋地区寺院の青年僧で申し合わせ、神戸へと向かいました。二食の弁当と、道具一式を各自が携えて、新幹線の一番に乗車。

現地は、本当に荒廃した瓦礫の山とか、本通り等は大々的に除去されているものの、一步入った露路では殆ど手つかずの状態、檀家もそれぞれに被災、仲々応援の手も回らず。そんな所で、ホコリにまみれ、最小限、生活にことかかぬよう道路のみを開けてきたそうです。

当寺の老僧が泣いて喜ばれた由。ボランティアはどうあるべきか。この際みんなが一度考え直す必要があるんじゃないか。また、今回「迷惑ボランティア

という言葉も生まれました。これは一体どうしたことでしょうか。

私共、「かにえ国際交流友の会」は、蟹江或いは近隣に在住する外国の方々が、異国の地で淋しい想いをする事なく、就労・家庭生活ができるようにとの願いで、スタートしたわけでありました。

私共、会員と外国の人達が、共に語り共に勉強し、共にリクリエーションに参加することができるように努力しなければなりません。

◆催しには進んで参加するよう、隣人にも誘いがけをしたいものです。

◆日頃思い当たることがあれば、どんどん発言することだと思います。こうしたことが、素晴らしいアイデアともなり前進することも可能であると思えます。

◆今一度初心にかえって、何の為に入会したかを考え直すことも大切かと思えます。

◆機会あるごとに外国の人と接する場をつくる努力もしたいものです。

(1995年3月 記)

ご協力ありがとうございました

① 阪神大震災救援募金	阪神大震災外国人救援ネットへ	118,828円
② バングラデシュ洪水救援募金		11,087円
③ クリスマス特別募金(財)アジア保健研修財団(AHI)へ		15,695円
* その他……テレホンカード	34枚(未使用)	

◆ 1995年度行事足跡 ◆

6月25日	ちゃんこ鍋大会
7月9日	サモア料理講習会
8月12・13日	盆踊り、そうめん流し
10月1日	バーベキューパーティ
11月26日	定例会(海外青年協力隊員報告)
12月10日	クリスマス、もちつき大会
1月7日	定例会 (フィリップ・ロバート君を招いて)
2月24日	講演会 (ジョージ・ミーガン一家を招いて)
3月10日	ホームステイ勉強会

「かにえ国際交流友の会」(KIFA)は、町民レベルでの国際交流をめざす蟹江町公認のボランティア団体で、蟹江町とその周辺の市町村に居住する会員で構成されています。年数回の各種行事等を企画し、外国人との交流を深めています。関心のある方ぜひご入会ください。お問い合わせは右の事務局までどうぞ。(年会費は、個人会員3,000円、賛助会員10,000円です)

あとかぎ

- ・お金貯め祖国バングラデシュへ帰ったラジュールさん、夢が叶うことを祈っています。(服部小夜子)
- ・この一年で外国が身近になり、いろいろな事を始める一歩にしたいと思えます。(小林 文子)
- ・各イベントをする度に新しい出会いが生まれるこの会に感謝、来年度もどんな人たちと出会えるのか楽しみです。(大飼 薫)
- ・それぞれの国の情景が目につかび、行ってみたい、よその国。(松原 庸子)
- ・国へ帰って「日本で楽しかったことを思い出します」という便りに嬉しさが増します。小さな一歩から何かが始まりますね。(鈴木つたえ)
- ・去年8月から始めた日記、3月になって少し空白の日が続いています。KIFAでの活動には空白がないようにと、思っています。(谷口 信一)
- ・今回の原稿が多く、1ページ増えました。10年後にはこの会報が本のように厚くなっているのも夢でないかもしれません。(藤田 美保)

●現在の会員数

・個人 92人 ・企業 6社 ・賛助 16人

かにえ国際交流友の会

事務局 蟹江町役場 企画課

〒497 愛知県海部郡蟹江町大字西之森字長三郎2

TEL(05679)5-1111 FAX(05679)5-9188